

次の日、少し寝坊して起きた。モーニングは、朝9時までだったけど、8時50分頃に行って、急いでオレンジジュースをがぶ飲みした。その日は由比ヶ浜を後にして横浜に向かうことに決めていた。横浜では、大きな国際展が行われており、それを見ることと、同時期に開催されている展覧会で友人の作品を見るのが主な目的だ。由比ヶ浜から横浜までは結構、距離があるように思っていたけど、そこまで距離を感じなかった。行くときは時間が長く感じたけど、一度通った道は、短く思えるやつ。横浜に着いたらすぐに、美術館の方に向かった。横浜の美術館はとても好きで、いつも面白い展示をやっている。私は神戸で育ったが、横浜は幼少期を思い出す。美術館に入る前に、近くのショッピングモールで少し時間をつぶした。よく見るお店が立ち並んでいて、見たことのある服や雑貨が置いてあり、私はふと、変だなと思った。横浜の風景を見て、神戸を思い出したこともそうだけど、もしかしたら、日本の都市では、ある一定の水準が守られていて、どこに行ってもほとんど同じ体験になってしまうのではないかと疑問を抱いた。面白いというか不気味に感じた。

美術館には、結構なボリュームで色々な美術作品が並んでいた。例年に比べて、サービス精神の行き届いた構成になっており、少し説明に酔った。作品自体はいくつか気になるものがあった。個人的には、中国やインドネシアなどアジア系の作家が好みだった。そして、少しアジアの人には日本はどう映っているのか気になった。

そのあと別会場の倉庫に系列バスで移動した。いろんな作品が並んでいて、ドイツ人の作品がとてもユニークで目に止まった。そして、ある日本人作家が岡倉天心とアジアの国々に関する作品を作っていた。私はその作家は、アジアと日本の関係性に対して真面目に向き合っていると以前から感じていたし、私もアジアへの興味がより強くなった。少し意識して生きようと思った。私は、過去に台北、ソウル、香港に旅行した。台北には2度旅行した。一度目は台北の大学の展覧会に参加した。そのときは、とても多くの台湾のアーティストと知り合いになり、色々なことを話すことができた。国という意識を超えて、同世代のアーティストとして、それぞれの問題に向き合うことができたように思えた。もちろんナショナリティーのことも話したけど、言葉がうまく話せない中で、たどたどしく自分のことを話すこと、相手のことを聞くのは、本当に楽しかった。僕は田舎で育ったとか、私は台南の方で生まれて、台南はとても暑いとか、すごくプライベートなことでもインターナショナルな感じがした。国という意識を超えた感覚があった。ここ最近ふさぎ込んでた気持ちが少し晴れた。

展示で一番胸を打たれたのは、福島のもう入れない区域に踏み込んで撮影した映像をVRで体験できるようにしたものだだった。それを見たとき『超える』感覚があった。自分が無意識に見ようとしていないものがあったことに絶望したし、そのことを見えるようにした作品を作った人に感動してしまった。私は自分がとても臆病であることに気づいた。情けないことにもう言葉が見つからなかった。

倉庫を出て、少し周辺を歩いた。少し歩くと、広場や公園があったりと結構有名な観光地で、人もたくさんいた。美術館から来た人、ただご飯を食べに来た人や中学生ぐらいのデートに来たカップルなどで、なんかごちゃごちゃしていた。でもまあ割と嫌いではなかった。少し気分を落ち着けたかった。周辺を一通り歩いて、天気が少し悪くなってきたので次の会場に行こうとバスに乗ることにした。

友人の展示を見に行く。黄色いワンピースの女性と入り、彼女はずごく目に止まった。展示会場では、小さな電光掲示板に文字が映し出されており、特撮感があった。奥に入っていくと瓦礫の山が見えてきて、そこに埋め込まれた透明な素材にギョロギョロ動く目が投影されていた。直情的な作品で少し考えさせられた。しかし、私は自分と一緒に入って常に同じペースで見ている黄色いワンピースの存在が気になり、あまり集中して見るができなかった。結構ゆっくりまわって会場を後にした。もとの展示会場へ向かっている途中で黄色いワンピースの女性をまた見かけた。道路を挟んで向かい側を歩いている、私とは別ルートで同じ場所に向かっていることはすぐにわかった。でもそんなことはよくあることで、その時は気にしていなかった。そして同じタイミングで会場の窓口についた。その女性は振り返り、話しかけてきた。

友人の展示を見に向かった。もともと同級生で大学院から広島にいった2人の友人が出しており、2人の先生も展示していた。まず別の会場にあるその先生の展示を見に行くことにした。ナショナリティーのことを扱う作品を作ることが多く、今回はゴジラについての作品が展示されていた。ゴジラは、人気もあるし、原発のことも関係してとてもデリケートなモチーフだと思う。展示会場は、地下で真っ暗だった。少人数に分かれて入っていくようになっていた。黄色いワンピースのととても綺麗な女性と入り、彼女はすごく目に止まった。展示会場では、小さな電光掲示板に文字が映し出されており、特撮感があった。奥に入っていくと瓦礫の山が見えてきて、そこに埋め込まれた透明な素材にギョロギョロ動く目が投影されていた。直情的な作品で少し考えさせられた。しかし、私は自分と一緒に入って常に同じペースで見ている黄色いワンピースの存在が気になり、あまり集中して見るができなかった。結構ゆっくりまわって会場を後にした。もとの展示会場へ向かっている途中で黄色いワンピースの女性をまた見かけた。道路を挟んで向かい側を歩いている、私とは別ルートで同じ場所に向かっていることはすぐにわかった。でもそんなことはよくあることで、その時は気にしていなかった。そして同じタイミングで会場の窓口についた。その女性は振り返り、話しかけてきた。

友人の展示を見に行く。黄色いワンピースの女性と入り、彼女はずごく目に止まった。展示会場では、小さな電光掲示板に文字が映し出されており、特撮感があった。奥に入っていくと瓦礫の山が見えてきて、そこに埋め込まれた透明な素材にギョロギョロ動く目が投影されていた。直情的な作品で少し考えさせられた。しかし、私は自分と一緒に入って常に同じペースで見ている黄色いワンピースの存在が気になり、あまり集中して見るができなかった。結構ゆっくりまわって会場を後にした。もとの展示会場へ向かっている途中で黄色いワンピースの女性をまた見かけた。道路を挟んで向かい側を歩いている、私とは別ルートで同じ場所に向かっていることはすぐにわかった。でもそんなことはよくあることで、その時は気にしていなかった。そして同じタイミングで会場の窓口についた。その女性は振り返り、話しかけてきた。

“ I’m sorry. I cannot speak Japanese. ”

女性は外国の人だった。私は驚いた。途中まで気づかなかったのは、とても日本人のような雰囲気があったからだ。女性は、窓口で困っていたので(今まで入っていたチケットでは入れず、別チケットを買わないといけなかったから)、私は奥から英語ができる人を呼んでもらい、なんとか対応してもらえた。すごく焦った。そして美人の振り返りはどの美術作品にも変えがたい恐ろしい強度を感じた。軽く会釈して展示を見に会場へ向かった。

少し話をすればよかったけど、そんなことは日本人相手にもしたことがなく、できなかった。僕は硬派な方だ。まずなんと声をかけていいのかわからなかった。そんな状態で展示を見ているものだから何も見えていない。もう何も見えてこない。でもせつかく来ているし、友人のはちゃんと見ないと、と思い、早足で友人の作品の方に先に向かった。一人は映像、もう一人は彫刻で、映像の人は、とても西洋的でスペクタクルで、彫刻の人は、土着的でクールな印象。それぞれの人となりが出ていて、とても素直に見れた。よかった。芸術作品はそういうものであるべきだと強く思った。でも私がひどいのはあとの作品のことはもうほとんど覚えてないことだ。そのときは、なんであの時声をかけなかったのだろうとずっと考えていた。そして時折見える黄色いに対して、まだいるという安堵感と焦りを同時に感じていた。

別のことを考えていると必然的に鑑賞時間は短くなり、あっという間に見終わってしまった。唯一友人以外で覚えているのは、電球がひたすらに回っている作品だ。思慮深いと思った。見終わった後、何を期待しているのか、なかなか建物を出ることができず資料や本が売っている備え付けのショップでしばらく時間をつぶしていた。結構な時間いた。しばらくすると黄色いワンピースのの女性が降りてきて、ショップに入ってきた。僕は、それまで英語で何とさえばいいのだろうと必死で考えていたのにもかかわらず、いざとなると全くノーアイデアで、ただただそこにある本を読んでもないのに眺めていた。そしてなぜか最終的に黄色い女性は、同じ本を隣どうして読みはじめていた。私は悲しいほどに情けなく、空気に耐えられず、その本の隣にあった、覚えていた電球が回る作家の本があったので、本を手に取り、逃げるようにカウンターに向かった。多分声をかけなければならなかった。そういうルールだと後で気づいた。一言声をかけるだけでもできず、横浜の景色を見ながらガックリきた。いつまでもいるわけにもいかないので、展示会場がもう一箇所あったのでそこに向かおうと思って建物を出ようとした。すると渦中の女性は、石のベンチで休憩しており、地図を眺めていた。もうぼきぼきに心が折れていた僕は、何もできず、急いでバスに乗り込んだ。

次の会場へは、バスで15分ぐらいで着く予定だったけど、色々考えすぎて乗り過ぎ、結局30分くらいかかった。バスの中では、スマートフォンで観光客に声をかける英会話をひたすらに調べた。僕はもし困っている外国人がいたら次は声をかけることにしようと誓った。自分が海外に行った時困った時は声をかけてくれたはずだと。声をかけられなかったことを帳消しにするためにその女性がめっちゃくちゃ美人だったからと自分に言い訳した。

“ Where are you from? ” “ May I help you? ”

次の展示は、高架下に作られた比較的に小さい会場を回る形式だ。若いアーティストたちがすごく強くで生々しい展示をしていて、とても胸を打つものがあった。しかし、展示も佳境に差し掛かり、誰かのアトリエが解放されているオープンスタジオに入った時、後ろから、見覚えのある黄色いワンピースの女性が目に飛び込んできた。展示会場はブラックライトで照らされており、黄色はより強調されていた。僕は、この会場に来る途中のバスの中で色々調べて何かに誓いを立てただけけど、そんな誓いは、全くの無意味で、僕はこの会場においてただの棒と化していた。またしても何もできなかった。もうする気がないといった方が正しい。そして、目の前に見えた出口からその会場を後にした。もう夜だったし雨も降り出した。私は、この後、友人に会い、泊めてもらうために東京に向かうことにした。

この出来事は、私の言語能力の低さとステレオタイプで臆病な自分を露呈した出来事だった。相手が女性だったこと、さらに美女だったことに私はおそらく怖気付いた。自己防衛が全ての親切心を上回り、一つの行動を妨げていたことは事実だ。何かを期待していた私は私自身を恥じた。

数日後、この出来事に関して別のことを想像していた。彼女が黄色い服を着ていたこととも関係して「黄道」のことを私は思い浮かべた。黄道は、地球から見た太陽が、天空を回る見かけ上の円周軌道、(＝地球の公転軌道)を意味する。私(地球)から見て、太陽が自分の周りを回っているように見えて、実際は私(地球)が、太陽(あなた)の周りを公転している。そして、黄道に月が干渉してくる時、つまり黄道と月の軌道が交わる場所は、「昇交点」「降交点」という特別な名前がついていて、「日食」や「月食」が起こる。別の存在が干渉することによって互いの存在を認識することができる。それがまさにこの出来事だった。これに気づいた時、全てを整理したような気分になった。

私は、この出来事を太陽と地球、黄道の動きなどを用いて、図解で考えてみることに決めた。